

修士論文（要旨）

2009年7月

デイサービス利用高齢者の口腔関連 QOL の実態とその関連要因

指導 新野直明 教授

国際学研究科

老年学専攻

207J6901

佐藤可奈

## 目次

I. はじめに	1
1. 研究の背景	1
2. 先行研究	1
3. 目的	3
4. 用語の操作的定義	3
II. 研究方法	3
1. 対象と方法	3
2. 調査内容	4
3. 分析方法	4
4. 倫理的配慮	5
III. 結果	5
1. 属性に関する調査結果	5
2. 口腔関連QOLに関する調査結果	5
3. 口腔関連QOLと各属性との関係	6
IV. 考察	6
1. 属性について	6
2. 口腔関連QOLについて	7
3. 口腔関連QOLとの関連要因について	7
V. 結論	9

引用文献

資料

## 【研究の背景と目的】

2004年の介護保険制度の改訂では、口腔機能の向上に関するサービスが新たな事業の一つとして位置づけられた。このサービスが導入された背景として、「身体は健康であっても、口は寝たきり」という多くの要介護高齢者が見逃されることになったことが挙げられる。<sup>4)</sup> 口腔に関する関心は高まっている一方、高齢者の口腔に関連するQOL (Quality Of Life、以下QOL) についての研究報告はまだ少ないのが現状である。

本研究では、日常生活を送るうえでケアが必要な要支援・要介護高齢者の口腔関連 QOL に影響を与える要因を検討するために、デイサービスを利用している高齢者について、口腔関連 QOL が生活状態や身体状態、口腔内状態とどのように関連しているか検討することを目的に調査研究を行った。

## 【方法】

東京都A区Bデイサービスセンターを利用している要支援・要介護高齢者 50 名を対象とした。調査期間は 2008 年 12 月 24 日～2009 年 1 月 6 日であり、研究実施者が対象者への聞き取りと観察を行った。調査内容は、対象者の属性として性別、年齢、要介護度、食事形態、食事自立度、食欲の有無、ADL (更衣、移動、排泄、入浴)、認知症高齢者の日常生活自立度、障害高齢者の日常生活自立度 (以下、寝たきり度)、生活保護等受給の有無、同居の家族の有無、機能歯数、現在歯数、義歯使用の有無、計 14 項目を調べた。また、口腔関連 QOL は内藤らによる「GOHAI (General Oral Health Assessment Index) 日本語版」により評価した。

属性と口腔関連 QOL の関係をみるために、各属性の回答を二群に分け両群の GOHAI 得点の差を Mann-Whitney の U 検定により分析した。また、GOHAI を構成する 3 つの下位因子 (機能面、心理社会面、疼痛・不快) と属性の関係についても Mann-Whitney の U 検定により分析した。

## 【結果と考察】

口腔関連 QOL について、GOHAI の合計得点は平均  $52.3 \pm 7.9$  点であった。3 つの下位因子については、第 1 因子の機能面は平均  $20.8 \pm 4.3$  点、第 2 因子の心理社会面は平均  $22.2 \pm 3.9$  点、第 3 因子の疼痛・不快は平均  $9.4 \pm 1.0$  点であった。口腔関連 QOL と各属性の関係として、常食を食べる要支援・要介護高齢者は口腔関連 QOL が高いことが明らかになった。GOHAI の 3 つの下位因子では、常食を食べる要支援・要介護高齢者、食欲がある要支援・要介護高齢者、年齢の若い要支援・要介護高齢者は、口腔関連 QOL の機能面が高いことが示された。心理社会面、疼痛・不快と関係のある背景要因はなかった。

GOHAI の合計得点の平均は、松岡らは  $55.4 \pm 4.8$  点<sup>16)</sup>、細元らは  $57.3$  点<sup>17)</sup> であり、本研究対象の方が低くなった。松岡ら、細元らは一般高齢者または特定高齢者を対象としているが、本研究では要支援・要介護高齢者を対象としている。主観的な咀嚼困難感があると運動機能が低いと言われており<sup>21)</sup>、今回の結果はそれを支持するものと言えるだろう。

常食を食べる要支援・要介護高齢者は口腔関連 QOL が高かった。常食の摂取を可能にす

るには、嚥下機能や咀嚼機能も重要な要素となる。<sup>4)</sup> 食事形態は口腔関連QOLを構成する 3 つの下位因子のなかでも特に「機能面」との間に強い関連が示されたこともあり、食事形態は嚥下や咀嚼に関する機能を介して口腔関連QOLと関連している可能性が高いと考える。

食欲がある要支援・要介護高齢者は口腔関連QOLの機能面が高かった。食欲がある高齢者は日常生活満足度も高いと言われており、<sup>25)</sup> 日常生活満足度の構成要因には、口腔に関連する満足度も含まれると考える。今回の結果はそれを支持するものと言えるだろう。

年齢が若い要支援・要介護高齢者は口腔関連 QOL の機能面が高かった。加齢とともに現在歯数が減少し、義歯の使用者が増加する傾向にあることは 2005 年の厚生労働省歯科疾患実態調査の結果からも明らかであり、その影響もあって高齢者では摂食・嚥下機能の低下が生じやすくなる傾向がみられる<sup>4)</sup>。年齢が若い要支援・要介護高齢者の方が口腔関連 QOL、その中でも特に「機能面」が高いと考えられる。

なお、複数の先行研究で口腔関連 QOL との関連が指摘されている義歯使用、現在歯数は<sup>14)・18)</sup>、今回の結果でも有意ではなかったが関連する傾向があった。義歯を使わないこと、現在歯数が多いことが、口腔に関する良好な主観的評価につながる可能性はあると考えられる。

本研究は、横断研究であるため因果関係を特定できるものではない。対象者は、50 名の要支援・要介護高齢者であり、結果の一般化には慎重な対応が必要である。また、要因相互の影響は検討しておらず、これは今後の課題である。

## 引用文献

- 1) 総務省統計局：平成 20 年 10 月 1 日現在推計人口. 3, 2009
- 2) 国立社会保障・人口問題研究所：日本の将来推計人口（平成 18 年 12 月推計）. 2-9, 2006
- 3) 社団法人日本歯科医師会：これからの口腔保健のあり方に関する考え方—生涯を通じた口腔保健を推進するための法的基盤の整備を目指して—. 2-3, 2008
- 4) 厚生労働省：口腔機能の向上マニュアル—高齢者が一生おいしく、楽しく、安全な食生活を営むために—. 6-19, 2006
- 5) 深井穂博：歯数と生命予後. ヘルスサイエンス・ヘルスケア, 7, 39-40, 2007
- 6) 高野直久：歯と口の健康からはじめる健康長寿. 教職員の生涯設計, 2007
- 7) 加藤順吉郎：福祉施設及び老人病院等における住民利用者（入所者・入院患者）の意識実態調査分析結果. 愛知医報, 1434, 2-14, 1998
- 8) 花田信弘, 森本基, 宮武光吉：口腔保健が関係する生活の質（QOL）, WHO 第 2 回国際共同研究（ICS II）報告書の概要, 第 20 回. 日歯評論, 65, 180-190, 2005
- 9) 花田信弘：口腔疾患と QOL 評価. 臨牀看護, 33, 1846-1850, 2007
- 10) 深井穂博：行動科学における口腔保健の展開. 保健医療科学, 52, 46-54, 2003
- 11) Slade G : Derivation and validation of a short form oral health impact profile. Community Dent Oral Epidemiol, 25, 284-290, 1997
- 12) Kressin N, Spiro A 3 rd, Bosse R, Garcia R, Kazis L : Assessing oral health-related quality of life, Med Care, 34, 416-427, 1996
- 13) Tickle M, Craven R, Blinkhorn AS : An evaluation of a measure of subjective oral health status in the UK. Community Dent Health, 14, 175-180, 1997
- 14) Atchison K, Dolan T : Development of the geriatric oral health assessment Index. J Dent Educ, 54, 680-687, 1990
- 15) Locker D, Matear D, Stephens M, Lawrence H, Payne B : Comparison of the GOHAI and OHIP-14 as measures of the oral health-related quality of life of the elderly. Community Dent Oral Epidemiol, 29, 373-381, 2001
- 16) 松岡文字, 山下一也：地域在住高齢者の口腔内健康状態と心身健康状態との関連. 島根県立大学短期大学部出雲キャンパス研究紀要, 1, 1-7, 2007
- 17) 細元裕里, 生野繁子：介護予防教室に参加している高齢者の義歯の使用の有無と QOL との関連—General Oral Health Assessment Index (GOHAI) を用いて—. 老年看護, 38, 132-134, 2007
- 18) 栢山智博, 池邊一典, 森居研太郎, 雨宮三起子, 松田謙一, 和田誠意大, 香川良介, 野首文公子, 小野高裕, 野首孝祠：高齢者の咀嚼能率と口腔関連 QOL との関係. 日咀嚼誌, 16, 99-100, 2006
- 19) 内藤真理子：口腔分野における QOL 評価について—海外版尺度 GOHAI の日本語版作成—. I Hope Newsletter, 2, 1-4, 2004
- 20) 川田洋子, 岩崎テル子, 岡村太郎, 今井信行：高齢者における機能歯数と心身機能との関係について—介護度、認知機能、食事評価との関連より—. 新潟医福誌, 6, 22-27, 2006
- 21) 葎原明弘, 高野尚子, 宮崎秀夫：65 歳以上高齢者における全身状態と口腔健康状態の関連—特定高齢者判定項目から. 口腔衛生会誌, 58, 9-15, 2008
- 22) 飯沼光生, 安井清子, 峯田淑江, 山田幸子, 田村康夫, 久保金弥, 桑野稔子：老人保健施設入所者における痴呆と口腔状態, 生活自立度との関係. 岐歯学誌, 30, 150-155, 2004
- 23) 森田一三, 中垣晴男, 熊谷法子, 奥村明彦, 桐山光生, 佐々木晶浩, 根崎端午, 阿部義和, 才藤栄一：日帰り介護施設（デイサービスセンター）の利用者の生活食事状況と嚥下機能の関係. 日本公衛誌, 5, 456-436, 2003
- 24) 田村文誉, 水上美樹, 小沢章：某老人保健施設入所者の実態調査—顎位の安定性, RSST, フードテストと日常の食形態との関連について—. 日本摂食・嚥下リハ学会雑誌, 4, 69-77, 2000
- 25) 葎原明弘, 清田義和, 片岡照二郎, 花田信弘, 宮崎秀夫：地域在住高齢者の食欲と QOL との関連. 口腔衛生会誌, 54, 241-248, 2004
- 26) 正村一人, 吉田英世, 小野桂子：高齢者の主観的咀嚼感と残存歯数および健康感との関連性. 日本公衛誌, 43, 835, 1996
- 27) 森居研太郎, 池邊一典, 北村和也：咀嚼の主観的評価と客観的評価との関連. 日咀嚼誌, 12, 118-119, 2003
- 28) 水野映子：要介護者等の屋外・屋内移動の現状—要介護者等を対象とするアンケート調査の結果から—. Life Design Report, 1, 16-23, 2004